

この頃うちの犬を見ていると、死んだ祖母を思い出して何だか胸騒ぎがする。最近あまり鳴かなくなつて、そのきらいは一層ひどくなくなった。

カールは七歳になる、くるんと曲がった尻尾が特徴の雌の柴犬だ。名前を呼ぶととぼとぼ駆け寄つてきて、前足を上げて飛びついてくる。その仕草は愛くるしいものなのだが、同時に私は気持ち悪いとも思った。

カールは目が見えない。だから、上手く前足が私の太ももに着地することは少なくて、多くは地面にたたんと落ちた。ハアハアと舌を出して、俯きながら頼りなさそうに足踏みをする。

もう一度名を呼ぶと、意味もなく目が合う。カールの両目はよく見ると肥えた巨峰の粒のように腫れていて、血混じりの目やにでぐちゃぐちゃだ。

私は手を差し出して、出来立てのかさぶたに触れるみたいに毛の白い顎の部分を撫でる。柔らかくて温かい。私はこの感触が好きだった。だから安心してベタバタ触る。カールはそれに応えるように静かに私の指を舐めてくる。濡れていく指の先から獣の生ぬるい臭気が鼻まで届く。私はそんな様子を少し遠い所から、意識だけが私の肩越しに見ているような不思議な気持ちになった。

そういえば、私は祖母にもよくこうしてベタバタと触つた。祖母は嫌がらなかった。むしろ、変な子、なんて弱く笑っていた。祖母はいつも自室の電動ベッドで寝ているか、小さな箱型テレビを見ていた。本当に小さいころ、私は祖母と過ごすことが多かった。祖母は足が悪くて、話し相手にしかならないけれど好きだった。姉と弟に挟まれて生まれいつも暇だった私には必要で、祖父一

―即ち祖母にとつての夫はもう居なくて、だから祖母からしても私は支えだったのだ。

部屋の中にはカーテンを透く太陽の日差しとコーヒーの後味みたいな匂いが染みついていて。私は何でも祖母に聞き、祖母は何でも答えた。布団に潜り込み、仰向けに横たわる祖母の冷たくて瘦せた左腕を抱きしめる。

耳が遠い祖母と乱暴に声を張り上げずに話すためには、うんと耳元に口を近づけねばならなかった。

おじいちゃんはどんな人だったのと聞くと、そうねえと、遠くを見つめながら考える。

「頑固な人。気に入らないことは言葉で言つてわかる人じゃなかったわ」

そう言つて悪戯っぽく微笑む。

「あなたのお母さんとお父さんの結婚にも大反対だった。そのくせいざ結婚が決まると、ここのおうち、みんなで住めるようになって張り切つて改装して」

ふうんと相槌を打つと私は居間の仏壇に飾られた、少し照れくさそうに笑う白黒の祖父と足の悪くない祖母とを頭の中で動かした。そんな空想の間に、祖母は自然と言葉を差し挟まなかった。

「おばあちゃんは、毎日楽しい？」

一瞬呆気にとられたように口が小さく開いて、閉じて、そうねえ、と置く。

「私は毎日あなたが話してくれて楽しいわ」

そう答える祖母の声色は握り固めた片栗粉のような風合いをしていた。

私があるとき鼻で深く息をしながらにっこりとしたのは、親愛への喜びというよりむしろ、脆さへの呆れが表れたものだった。

「わたしも」

布団の中の空気が酷く熱くて心臓はうるさかったけれど、このとき、抱えた祖母の腕を離す気にはなれなかった。その日は祖父の命日だった。

それからしばらくで、祖母は水やりを忘れられた植木の花のように死んでしまった。カールがうちに来たのはそれから一年も経たない冬のことだ。

カールは三歳上の姉の誕生日プレゼントだった。長い目で見ればこんなに高い買い物は無いだとか、家族で旅行に行くのも難しくなるとか言って、父も母も最初は渋ったのだけれど、姉はしつこかった。近所の友達が羨ましかったのだろう。世話は全部自分でやるとのこと、その他種々の誓約の下でカールは遂に家にやって来た。私は期待と恐れを持ってその日を迎えた。

生後四か月だったか。まだ短かった足、つぶらな瞳。私はぬいぐるみの精巧さを知るのだった。小さいから、まだリビングでケージの中に入れていた。ご飯もまだ水でふやかしてやらなきゃ食べられない。私は触って撫でて、抱っこしてみたかったけれど、姉はそれを歓迎しなかった。

「近づかないほうが、いいよ」

姉は、カールをケージの上から見下ろして、満足げに笑いながら言った。どうしてと聞くと、

「懐いてないと、噛むから」

姉は犬を飼うにあたってこの頃熱心な勉強をしていた。姉には怖がらせようというつもりは無かったのかもしれないけれど、言うとおりにせざるを得なかった。私は自分に害をなす物に臆病な性質であったし、噛むということとは、犬にとっても嫌なのだろうと思っただ。姉の独

占欲が薄れてからも、私は他の家族がカールを可愛がる様子を遠巻きに見ていた。

私が中学に入った頃だ。カールは腰ほどに大きくなり、それに伴って庭飼いするようになっていた。昼は外、夜は内。散歩に行くのは夕方に一回と、家族の習慣の中にはすっかり世話が溶け込んでいた。

姉がある異変に気付いたとき、事情が変わった。カールの右目がおかしい。お父さんに相談して一緒に病院に連れて行って、帰ってきたので話を聞けば、目に何かが突き刺さって、もう片目が見えないと言う。目薬をもらってきて、朝に一滴患部に落としてやるのが新たに習慣になった。しばらくして、もう片方の目も潰れたと聞いた。

私はそれがあの背の低いアカマツのせいだと知っている。庭に植わった夥しい針葉を持つあの木が元気に動き回るカールの目を刺したのだ。祖父の植えたその若木を父は刈ることに後ろ向きだった。誰が気づくでもないうちに、カールは目でもものを見るといことができなくなっていた。

あるとき、もうじき暗くなるというのに姉が一向に出かける気配がないのに気づいて、散歩はどうしたのかと聞いた。

「いや、行ってないよ。ていうか、もう行かないよ。目が見えないんだから、危ないでしょ」

姉は物悲しげに笑った。

「あんたはてつきり犬が嫌いなのかと思っただけだ。」

行きたきゃ行ってもいいよ。ぶつからないように、ちゃんと見てれば大丈夫だから」

私はそれを聞いて散歩をすることはなかった。カールは目が見えない以外は別に普通だったけれど、こぼれそうなほど肥大化したその黒い瞳を見ると何だか手遅れという気がぬぐえなかった。

日曜の夕暮れにはテレビを付けてもつまらないニュース番組しかやっていなかった。それでも、食卓を囲み、家族で談笑しながら餃子を包むのは楽しかった。普段でんで料理をしない私からしても、餃子づくりは家族の共同作業でしかありえないと思える。一人で一人分の餃子を作って食べる状況は全く想像できない。テレキャスターの一言一句はただの背景音になって数少ない間を埋めていく。

「ティッシュ取って」

弟は誰にもなく言った。ティッシュケースが一番近い私は、餃子の皮を置き、ボウルに溜められた餡にスプーンを突き刺す。

「はい」

指先で一枚引き抜いて手を伸ばしてやる。

「ん」

鼻をかんでごみ箱に捨てる弟。

「そういえば、今度のゴールデンウィーク、どこ行くか決まったの」

手慣れた母は手元も見ずに話を振った。

「え、結局いくの？」

「ああ、とりあえず候補は三つに絞って、もう予約も取ってある」

父は新しく一つ、平皿に餃子を並べると、手振りをつけて話します。空気の澄んだ山のコテージ、海鮮の旨い海沿いの旅館、有名テーマパーク付きの高級ホテル。どれも魅力的だけど、どうせまた姉と弟の間で割れるんだろうと思った。

「どれがいいかな」

しかし、一番に口を開いたのは姉でも弟でもなかった。うなり声のように近づいてくる救急車のサイレン。次第に大きくなる音。家族はみな、同じ予感に身構えた。

「ウォーンっ」

やっぱり鳴きだした。こうなると、カールは中々止まらない。二度、三度となく、サイレンよりも強烈な緩急でうめく。ここは住宅街だから、迷惑極まりない。父は深くため息をつく、重そうに腰を上げた。リビングから、玄関へ続く扉を閉めて、カールのケージに向かう。私は餃子を作る手を早めた。別にカールが鳴くのは救急車だけが理由じゃない。目が見えなくなつてからと言うもの、些細なことから、カールはこのように鳴くようになった。サイレン、訪問者、目の前を通る姉の足を見てそんなことが続いた。

「カール、うるさいっ」

何かがぶつかる音がして、とても静かになった。お父さんが無表情で戻ってきて、餃子作りを再開する。テレキャスターが明日の天気を告げた。

「旅行、カールはどうするの」

恐る恐る聞く。テレキャスターがにこやかに、番組を締めようとする。

「……ああ、犬用のホテルも取っておかなきゃな」

餃子はみんなで作るほうが楽しい。パーティーみたいな特別感がある。祖母も私が物心つく前は、この輪の中に

いたのかもしれない。

数年が経った。姉は今東京で一人暮らしだ。自然とカールの世話は何から何まで私の担当になった。犬はめつたなことがないと嘸んだりしなかった。すっかり成犬になったカールは見た目だけ悪戯にたくましいばかりが目が見えない。姉と私の区別だつてロクについちゃいないだろう。でなきゃあまりにも懐くのが早すぎる。その上私はもう高校生で、何も恐れることがなかった。世話は簡単なことだ。朝、カールを庭に出してエサをやる。夕方、もう一度エサをやる。夜、家に入れてやる。気が向いたら撫でてやる。散歩は意味がないからしない。あとは、たまに話しかけてみることもある。

「カール、お前はつまらなくないの？」

カールは湾曲した尻尾を揺らしながら足踏みするだけなのだ。

カールの鳴き癖は次第に収まっていった。

カールは撫でられるがまま、特別鳴いて返すこともしない。背中をなぞる。ゴリゴリと骨の感触がして、少し瘦せたかなと思う。

「エサが欲しい？」

そう言つて、ふと思ひ出した。祖母のことだ。今のカール、どこか似ていると思つていたらこんなことだったのか。死ぬ前というのはきつとみな一様にこんな顔をするものなのだ。なんで死ぬのかも分からないのに、悟つたように静かになる。ゆっくり馴染むみたいに終わる。一度理解してしまえば、後は案外大人しく待っていれば

いい。

エサ入れにドッグフードを入れ終えて、カールに差し出す。鼻先に出してやると、匂いでちゃんと分かるのだ。でも、何故か一口食べて止めてしまう。

「どうしたの」

一つ、不安そうな艶のある響きでカールは鳴いた。私は両腕で優しく、分かちがたいもののようにその小さな体を包んだ。

「私はここだよ」

半ば陶酔しながらそんなことを言つてみる。

私は曲がりなりにカールを家族だと思つていた。大切にされてきたから。でも、結局は、家族は助け合つて集まるのだらう。互いが必要としなければ、要らなくなつてしまふんだらう。ただ一緒にいるだけでは家族になんかなれない。

（きつと、次は私なのだ）

人間は役に立つものから円を描くように序列が決まっている。そしていつも外側から雨風に晒される。不意にワケもなく他人から優しさを与えられることがあつても、それはたいがい余裕の表れか窮地への備えであると思つて森林でクマに襲われたら自分より足の遅い者があるといふ。一匹でも食われておけば後は逃げようとするのだから、常日頃から弱い者に目をかけておいて損はないはずだ。私は早くこの家族から離れなければならないと思う。一人でも生きていかないと。